

特集

地域のチカラ

より魅力あるまちを目指して今年度から本格的に進められている「協働のまちづくり」。それは、新しい支え合いの仕組みを構築し、できることから実践すること。地域の元気を引き出し、伸ばす。その主役は、わたしたち一人一人です。



京津畑老人クラブ主催で11月16日行われたふれあいグラウンドゴルフ大会には子ども10人と保護者、会員合わせて約40人が参加。地域のお年寄りが「先生」となり、大切な「孫たち」と温かな交流が行われました

市役所大東支所から車で約25分、市の最北端に位置する京津畑自治会。標高約330㍎の山あい、冬の積雪や寒さはひとしお。住民自らが「陸の孤島」と呼んでいます。現在56世帯で人口164人。地元の京津畑小は平成18年3月に閉校し、高齢化率は46%に達します。



上 自慢の菓子や弁当を地域に供給する郷土食研究会「やまあい工房」
下 旧京津畑小の利用について検討するプロジェクトチームの会議

地縁を見直す

地域の共同体の一番の基本は、自治会など、地縁でつながる「コミュニティ」。地域の将来像を自分たちで描き、目標達成に向けて活動している「コミュニティ」を紹介します。

『おいしい』と認められうれしい 郷土食と神楽をきっかけに 地域の良さを再発見 京津畑自治会

少子高齢化が進む厳しい状況の中にも、「地域に元気を」とさまざまな活動を進める同自治会。「県いきいき中山間賞」「県元気なコミュニティ100選」に選ばれ、注目を浴びています。

「きっかけは神楽と郷土食」と振り返る菊池建自治会長。中断していた地区の祭りを平成6年、神楽保存会の設立を機に「京津畑神楽まつり」として実施。8年

の祭りでは、女性たちがおやつとして振る舞った「がんばり」が大好評を博しました。祭りは徐々に進化し、12年からは各家庭が自慢の料理を持ち寄って自由で試食ができる食のイベント「京津畑・食の文化祭」として定着しました。

「ほかの人たちに『おいしい』と認められるとうれしい」と菊池会長の妻、カネ子さん。家族の

ための料理とはまた違うといえます。「春から、『今年は何を出そうかな』と考えて山菜を塩漬けにしたり、野菜を植えたり。地区の女性たちの大きな張り合いになっていきます」と語ります。口コミで評判が広がり、次第に地区外からも多くの人が訪れるように。19年に「思い出のおふくろの味、郷土の味、大集合！」のテーマで行った同文化祭には、遠くは仙台市からなど約600人が集まりました。

小さなあいさつの積み重ねで 安全安心な地域をつくる

一関16東区

「引越して転入してきた世帯には、必ず翌年班長になってもらいます」と一関16東区の河島一男区長は語ります。下の橋の南側に位置する同区は約250世帯。古くからの住民と新しい住民が混在する、典型的な都

市型の自治会です。「班長になれば自然と地域も人も覚える。転入してくるのは若い子持ちの人たちが多いので、子どもたちを地域の人に知ってもらおうきっかけにもなる」と効果を語ります。

通学路の途中にあるごみステーションでは、ごみ当番の役員が毎朝子どもたちに声掛けをしています。「時には注意することもあるが、知っている大人からなら、しかられても子どもは素直に聞いてくれる。また、同区の防犯活動の費用は、ごみ資源の分別を徹底し捻出しています。

同区の活動で特徴的なのが企業と連携した災害への備え。地区内のスーパーマーケットの倉庫に同区用の水と食料を常時置かせてもらい、災害時にそれを使えるようにする、という契約を準備中です。今後は災害時の機動力を高めるため、地区内の企業の重機を使わせてもらえるよう話し合う予定です。